

6. 固定費と変動費

管理会計を用いて意思決定を行う場合には、費用を固定費と変動費に分ける必要がある。財務諸表では固定費と変動費という科目は設けていないため、自分で分けることになるが、その見分け方や分解方法は次のとおりである。

(1) 固定費

固定費は、売上などの収入に影響されることがない費用で、具体的には家賃や人件費及び減価償却費などである。

(2) 変動費

変動費は、売上などの収入に比例し、収入が増加すると同様に増加する費用で、具体的には材料費などの原価や包装費及び発送費などである。

(3) 分類方法（固変分解）

固定費と変動費の分解方法としては数種類あるが、ここでは「よく使われ」かつ「簡単」な方法を紹介する。

① 費目別精査法

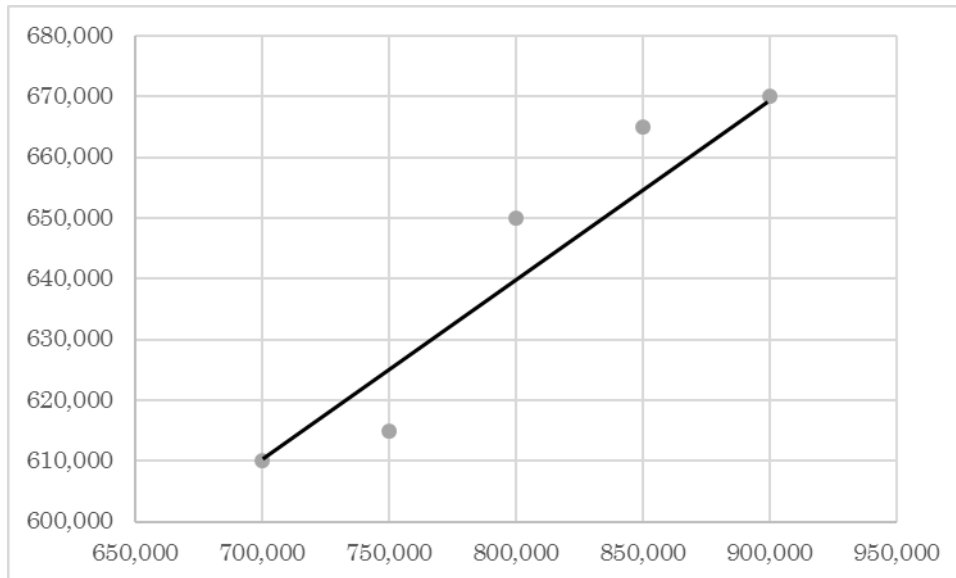
費目別精査法は、企業の業種業態によって一概に分類できないが、過去の経験等により、自分で科目別に固定費と変動費に分類する方法である。売上に連動する費用を変動とし、変動費以外を固定費とするが、どちらか迷う場合には5：5と仮定して配分する。大雑把であるが、ある程度の合理性はある。

② 高低2点法

高低2点法は、勘定科目が不明な場合に、売上と費用のデータをもとに固変分解する方法である。例えば、次のようなデータがあるとする。

	1月	2月	3月	4月	5月
売上	700,000	750,000	800,000	850,000	900,000
費用	610,000	615,000	650,000	665,000	670,000

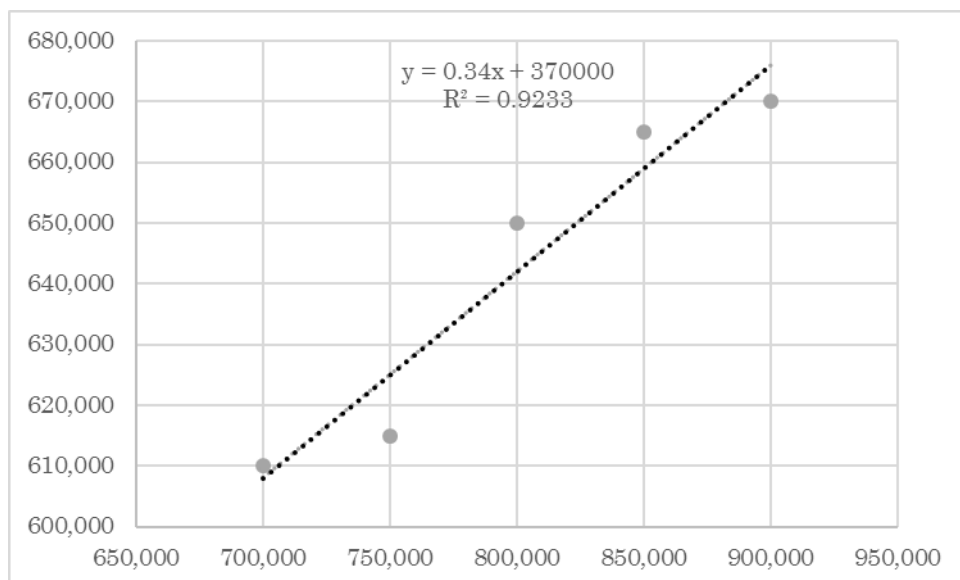
これをY軸に費用、X軸に売上の点を採った散布図を作成し、一番高い点と低い点を直線で結び、Y軸の接点（固定費）と傾き（変動費率）を求める。



傾きは、 $670 - 610 / 900 - 700 = 60 / 200 = 0.3$ となる。これを1次方程式で表すと、 $Y = 0.3X + A$ となり、 $A = -0.3X + Y$ なので、 $A = 400,000$ となる。したがって、売上が700,000のとき、変動費は210,000となり、売上金額に関わらず、固定費は400,000となる。

③ 最小二乗法（最小自乗法）

数学が苦手な方には、最小二乗法がおすすめである。数学的には、高低2点法よりもはるかに難しい微分の計算になるが、エクセルで簡単に表すことができる。



先ほどの散布図をエクセルで作成し、それに近似曲線を表示させる。この時、近似曲線の数式も表示させれば、高低2点法よりもより確実な固定費と変動比率を求めることができる。

ここでR²乗値の数値は、私にも意味はよくわからないが、1に近いほど精緻な

ものである。

数式は、 $Y=0.34X+370,000$ と表示されている。傾きが 0.34 なので、売上が 700,000 のとき、 $700,000 \times 0.34 = 238,000$ となり、変動費は 238,000 となる。

また、370,000 が固定費となる。最小二乗法は意味や計算方法が分からなくても、エクセルが使えるれば、簡単に表示させることができる。